

# 夢つないだ夏

第97回全国高校野球選手権大会  
準優勝 仙台育英学園高校  
三塁手 佐藤将太(3年) 迫町古宿出身  
捕手 熊谷慧河(3年) 中田町蓬田出身

第37回全国中学校軟式野球大会  
準優勝 秀光中等教育学校  
捕手 阿部大夢(3年) 中田町茶畑出身

Seiga Kumagai

Hiromu Abe

Syota Sato

2015年8月20日、阪神甲子園球場。東海大相模対仙台育英戦。県民の悲願である県勢初の甲子園優勝は果たせなかったが、その戦いぶりには、見ているものに勇気と希望を与える見事なものだった。

佐藤選手は三塁手として活躍。決勝戦6回裏、2アウト満塁の場面、走者一掃の三塁打を打ち、同点に追いついた。育英が優勝に近づいた瞬間だ。「重圧がかかるあの場面「将太とかくつないでくれ」と祈っていたところにあのヒット。しびれましたね」と熊谷選手。熊谷選手は控え捕手として、チームの活躍を支えた。「捕手は他と違い、交代出場の可能性が非常に低いポジション。万が一に備えて準備しつつ、チームを支える。誰にでもできることではありません。慧河がいたから決勝まで残りました」と佐藤選手。どちらかがいかなかったら、準優勝という結果は残らなかったかもしれない。

甲子園までの1年間、仙台育英は敗戦と反省を繰り返してきた。昨年の秋季東北地区県大会3回戦。聖和学園にまさかの敗北を喫する。その後、明治神宮野球大会で優勝するが、春季東北地区野球大会で盛岡大付属に敗北。

「一戦一戦大切にしよう」とみんなが誓いました。今年の夏は挑戦者として最後まで望みました。「優勝できなかったのは残念ですが、それ以上にチーム目標の『目の前の試合を全て勝つ』を実現できなかったことが悔しい」佐藤、熊谷両選手は語る。

仙台育英の準優勝から2日後の22日、福島市福島県営あづま球場で、育英の弟分、秀光中が門川中(宮崎県)と全中連覇をかけて対戦した。捕手の阿部主将は甲子園の決勝戦を見て「高校の分まで日本一になりたい」と試合に臨んだ。だが、思うようにチャンスは生かせず、五回のピッチではつり球が抜け、押し出し死球に。「あせってしまった」と悔やんだ。結果、1-5で負け、連覇は夢と消えた。

3人とも、推薦入学ではない。自ら高い志を持ち、強豪私立の門を叩いた。その思いを忘れずに努力したからこそ、ベンチ入りメンバーとなり今回の結果を残せたのだ。

今後の目標を3人に聞いた。「大学に進学して、野球を続けたい。その後のことはまだ考えていません(佐藤)」「競技としての野球は、高校で最後にするつもりです。東京消防庁で救助の仕事をしたと考えています(熊谷)」「育英に進学して、先輩たちの目標『目の前の試合を全て勝つ』を実行して、甲子園で日本一になります(阿部)」

先輩たちが果たせなかった夢は、後輩につながれた。真紅の大優勝旗の白川越えは、そう遠くない日に実現する。そう期待せずにはいられない。